

平成 16 年度「五三会」学生大賞

広島工業大学建築・環境系同窓会「五三会」
五三会顕彰制度認定委員会
渡辺 武彦

趣旨説明及び審査基準

【趣旨】

五三会学生大賞は、今年で9回目を迎えます。毎年卒業される学生諸氏の卒業設計を評価し、これを通じてこれからの進路に対し応援をしていきたいということで制度化いたしました。「五三会」という私たち同窓会事業では、設計競技が有名ですが、会の活動内容の詳細等につきましては、是非ともホームページをご覧ください。

さて、社会情勢は激しく変化し、また大学や学生を取り巻く環境も変化してきました。そこでこの賞の持つ意義目的を再確認し、審査基準を学生諸氏にわかりやすく説明することと、もっと興味をもっていただきたいと考えた次第です。

【審査員】

審査員は、五三会の会員の中から、五三会顕彰制度認定委員が任命します。具体的には各審査員が作品の評価を行い協議して決めますが、意見が分かれた場合は、最終的に多数決で決定する方式を採用しています。なお、大賞は1作品に限定してはいません。

【審査基準】

つい先頃まで社会と大学は、違う世界として成り立っていましたが、今や情報化が進み、会社の形態やニーズが多様化し、産学連携が進んでいます。中でも学生諸氏を起業家として育てるためや、会社と大学がお互いに研究や人材を共有し合うことで、大学の付近に関連施設などが積極的に造られる例も多くなり、益々大学と社会の境界がなくなってきています。こうした情勢の中で、各審査員から出された審査の観点を列記してみますと、

- ・歴史性・文化性、社会性、環境配慮（宇宙船地球号）、世界観、場所性・地域性
- ・公共性、提案性・現実性、表現性・デザイン性、個性的、構造的、設備的

のような内容となります。

この中で共通して重視している観点は、

社会性があるかどうか：現在の社会をどう観ているか。提案や、課題認識が適確か。

表現力があるかどうか：問題提起した内容に対する表現力とデザイン性はどうか、

そして魅力的作品となっているか。

作品の構造や設備などに、常識的な知識と配慮がなされているか。

などで、今回もそれらを基本にしながら審査をしました。

さらに、作品の直感的な第一印象はとても重要であり、これを加え学生諸氏の4年間の研鑽の集大成として、社会的に最もふさわしい作品であるかどうかを選定基準としています。

2004年度五三会学生大賞審査講評

【2004年度 五三会学生大賞候補 卒業設計作品】

審査員が選んだ大賞候補は、次の5作品です。

環境学部環境デザイン学科	森の学校	村井	由華
〃	魚町集積帯	城土	健作
〃	空白の地下	塚川	譲
〃	広島県庁跡地計画	槌田	瞳
工学部建設工学科	O・P・S・P	川淵	俊太郎

それぞれ力作で、内容と共にエネルギーで優れた作品と評価されました。その中で、さらに「森の学校」と「魚町集積帯」の2作品が絞られ、最終的には「森の学校」を大賞に選定しました。その大きな理由は、現代社会が抱えている社会的問題、人間性の崩壊などの病巣に対して問題提起し、解決の方向性を生み出し、新たな視点で表現していることでした。

【2004年度 五三会大賞受賞 卒業設計作品】

森の学校 村井 由華

この作品は、まさに現代社会の病巣に対する積極的な挑戦と癒しの場を表現していると思います。今回の卒業設計の中でも現代の社会現象を反映して子ども達の成長を育む場や施設を題材にしている作品が多く見受けられましたが、その中で内容・デザイン・表現共にインパクトがあり、いちばん目を引く作品でした。そして作者が相当苦しみ葛藤したあとがうかがえました。この作品はコンセプトの中で、五感・感性を育てる場所を提案しています。子ども達が成長していく過程の中で、人間が生まれながらに持っている生得性と習得性がありますが、生得性は脳生理学的には、人為的に教える事ができない幼児期にのみ自然との対話の中で生まれ、又習得性は生得性の資質に依存しているとも言われています。現代社会の中では、成長期の子ども達の環境は自然から遠ざけられ、大切な体験学習の場が失われています。この作品は森の中に多くの体感施設として感覚刺激空間を計画しています。山の稜線を這うアメーバ(amoeba)状の形態やこの森の間伐材を利用した立体トラスの巧みなデザイン、そして構造物としての形態は、今後の成長や新たな空間を生み出すのではないかと期待を抱かせる作品となっています。その中で、審査員から以下の意見も聞かれました。

- ・ この施設は誰が運営し、管理するのか。
- ・ 地域や地区に対する位置づけや、人々の生活空間からどれくらいの距離にあるのか。
- ・ 自然の森に対する生態系と施設工事とのバランスはどのように考慮されているのか。
- ・ 1日体感だけなのか。
- ・ 森という自然の中でありながら人為的な多くの仕掛けがあるが、作者の目的としている感覚刺激空間は作想的なプログラムの中で生まれ出るものなのか。

【まとめ】

大賞候補に選ばれた5作品の他にも、興味深い作品は多数ありました。しかしその逆もあり、これで卒業設計として認められていいのだろうかと首を傾げたくなる作品もありました。卒業設計は、テーマに社会性があり、問題意識を明確にし、それを表現したものが望ましいのではないかと思います。学生諸氏は卒業後、社会人として(院生になる人もいると思いますが)巣立って行かれるわけですから、今回の五三会学生大賞の審査の最も大切な基準となった「社会性」については在学中に身に付けるべきだと考えています。そのためには、学生生活の中で社会との交流を積極的に持つことや、情報を常に吸収して行くといった個々の姿勢が重要だと思います。また、学生の指導は、ゼミ単位での教員による所が大きいことは言うまでもありませんが、ゼミ単位にとどまることなく、オープンに交流を持ったり、発表会などの場を持つことを提案いたします。指導教員同士の作品に対する活発な批評や議論などが学生諸氏に多くのことを学ばせ、刺激を与えることは間違いのないところです。大学も社会と同様に大きな変革を求められています。五三会の活動も社会と大学のつなぎ役として、学生諸氏に活発に刺激を与えるような会でありたいと考えています。

【五三会大賞候補の他4作品について】

魚町集積帯

城土健作

この作品は紫川支流の神嶽川沿いの旦過市場一筋を入れた紫川までの場所を選び、その川沿いで真向かいの地域を再開発して魚町の顔を再構築し、住居と作業場、店舗そして地下の駐車場等を中層階の中に配し、路地空間や採光を巧みに取り入れ、デザイン性豊かな作品となっているところを全員が評価しました。

- ・ 魚町通りの歴史や文化が残り、今でも賑わいを見せている地域はむしろ川向かいの旦過市場のある地域の一方で、その中にこそ作者がコンセプトに示している「人間性に根ざした精神、無くなりかけている人間らしさと呼び覚ます」ものが息づいていて、それを今回の計画の中にどのように結びつけるかということが必要ではなかったか。
 - ・ 作品の中で旦過市場の一部を切り込んで数本のブリッジで開発地域を結び、簡単に処理されすぎているのではないか。
 - ・ 計画建物の中に、旦過市場の（あの狭い人間性豊かな路地空間を、長辺方向に建物内部か川岸側を通したら、もっと魚町の顔として作者の意図が出せたのではないか。
 - ・ プログラムの中で計画建物の住人としてターゲットにする特有な人とは、むしろ旦過市場の中やその延長線上に関係する人々であって、その人々がその地域に根ざした歴史や文化、そして人情、情緒などの人間性を大切に次代に引き継がせることを可能にし、それらが新たな町づくりを誘発して行くのではないか。
- などの意見も聞かれました。

空白の地下

塚川 譲

「空白の地下」「広島県庁跡地計画」の作品は内容こそ違っていますが、共通して審査員が問題点として指摘したのは地下施設に内容が集中しすぎて平地の公園、及び広場の扱いの希薄さが感じられたことでした。しかし、それぞれ地下の巧みな利用を考えた内容の豊かな作品で、特に「空白の地下」は、周辺を再開発した公園に向けて一体感を与える建物群やデザイン性など作者の力量を感じさせ、共通してエネルギーな作品として評価されました。コンセプトの中では新天地の魅力を再構築するための生命線ともいえる赤ちょうちんや屋台、路地のあの距離感の中にこそ潜んでいる人間臭さ、泥臭さ、飲んべえや酔いどれた者たちの安らぎの空間、そしてある種のベースさえ漂うような空間などが、この作品は綺麗過ぎて感じられないのが残念でした。（最近、大阪の法善寺横町の路地空間（通路2.7m）が2度に渡る火災を乗り越えて官民の話合いの中で復活し、前述のような人間性豊かな空間を残し、守って行こうとされています。）

- ・ この作品のコンセプトから言えば、広場（公園）周辺の平地（1階部分）の施設の在り方や、夜だけ屋台や公園内利用の色々なプログラムなどで新天地に息づいていたあの賑わいを出し、それに引きつけられて道行く人々が、地下や各階に自然に導かれるような提案が欲しかった。
- ・ 現在利用されていない地下部分と周辺再開発ビルとその地下を連続させ、その中に失ったものを求めようとしているが、雑居ビルに吸収された公園周辺の飲み屋街の現状と計画案との明確なちがいは、

広島県庁跡地計画

梶田 瞳

「空白の地下」と同様にコンセプトの中に「生涯学習センターを提案し、人々のアクティビティをまちへ拡張する」とあり、地上及び地下の動線計画が示されています。地下は既存の地下通路とのアクセスを巧みに使い、施設のアクティビティを活発化する点を評価しました。

- ・ 平地の広場と地下とはパティオの断面で示されているような吹き抜け空間と階段、EV、エスカレーターなどの垂直方向のつながりしかない。街へアクティビティを誘発させる大きな生命線とも言える空間は、地表の広場にもあって、地下と広場が自然につながっている形態が提案されたらもっと内容が充実したのではないか。
 - ・ 広場と中央公園との緑の連続を計っていることは頷けるが、見通しが良くて四方にアプローチが取れる広場であるだけでなく、四季の移り変わりや、1日中の天候の変化、雨の日、風の日などに対応する場であったり、人々がたまる場、その他内部の機能が表出し（行き交う人々に常にアクティビティを誘発する刺激空間として）昼夜パフォーマーが活躍できる場、移動式売店、その他この大きな広場に対する色々なプログラムが描かれていたらもっと良かったのではないか。
 - ・ 広場の中央付近にそびえるような塔状の三つの建物の配置が少し違和感を与え、周辺建物群との関連性が示されたら、デザイン的にももっと良かったのではないか。
- などの意見も聞かれました。

O・P・S・P（Open Play School Project）

川淵俊太郎

これは都市型の小学校（現在の職町小学校の敷地）の在り方に対する提案ですが、これも地下を利用した計画です。全体の構成は各教室やその他の付属施設などの巧みな配置計画は細部に神経が行き渡り、また原爆ドームを意識した軸線上に、全面ガラス張りの特別教室を配することで、平和への祈りを意図させるといったとてもエネルギーな作品になっています。

- ・ 最近小学校での極悪な事件などで都市に開かれた学校の防犯性が厳しく問われているが、本作品では学校の正門や、一般の人々と生徒たちの学校へのアプローチが分かりにくい。
 - ・ 全体が迷路のように感じてしまう。そのため低学が入学した時などに迷子が出るのではないか。何故低学年の教室が地下部分に配置されているのか。
 - ・ 障害者に対するスロープ、階段などが校舎中央のコアだけに収められていて他からのアプローチが遠すぎるのではないか。
 - ・ 都市の中の小学生に欠けている自然とふれ合う場が本計画では少ないことが気になる。
 - ・ 地下利用をした意味はどこにあったのか、むしろ聖地とも言える屋上の利用、緑化などにももう少し提案があっても良かったのではないか。
 - ・ 都市型の小学校がかかえている現状の問題点と、今後の在り方などに対する明確なメッセージが今ひとつ伝わってこない。
- などの意見もありました。